

# オリーブの木

No. 89

2023年7月



▲『聖なる救い主教会』（エルサレム）で。共同通信社の三井潔さん（右端）とイブラヒム神父（中央）、\*  
当法人の現地スタッフ、ヤクブ・ガザウィとご家族：妹クレール（左端）、母アリス（右より2人め）

いよいよ8月9日から、NPO設立20周年記念行事としての【平和の架け橋プロジェクト】が始まります。4年ぶりです。3カ国、14名の参加者が広島、長野、東京で共同生活。国籍も生い立ちも性別も違う若者たちが「平和をつくる」目的に向かってどんな「化学反応」をするのか楽しみです。毎年、決して容易ではありません。しかし、互いに同じ人間として受け入れることを通して信頼が生まれ、「人は平和共存が可能だ」と実感することが大切なのです。和平達成の糸口も見えない今だからこそ、オスロ合意も夢と消えつつある今だからこそ、草の根からの、特に若者同士の信頼を創り出すことが大切ではないでしょうか。平和へのあゆみ、希望の灯を絶やさないために。

2005年以来今年で13回のプロジェクト、いつも皆様のご支援があってこそ実施できたのですが、今回も変わらずたくさんのお志に触れ、感謝の心で一杯です。紛争地からの助けもあります。ヤクブのご家族は、2005年から毎年何人もの日本人を泊めてくださった他、大変お世話になってきました。その他、私たちの課題にさまざまな援助をくださる皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

井上 弘子



認定NPO法人

## 聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email [ispalejpn@gmail.com](mailto:ispalejpn@gmail.com)

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名  
「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

# イスラエル・パレスチナ紛争75年、二国家共存は遠く

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

今年には1948年5月のイスラエル建国宣言75周年にあたります。裏を返せば、住んでいた土地を追われた難民を多く抱えることになったパレスチナ人にとってはナクバ（大惨事）75周年であり、未だに自分たちの国を持っていません。一方、両者の和解を目指してパレスチナ自治に道をつけた1993年9月のオスロ合意から30年の年でもあります。この節目の年に「聖地のこどもを支える会」は、特定非営利活動法人（NPO法人）の資格を取得してから20年目を迎えました。この機に、当法人の重要な事業の一つ、イスラエルとパレスチナの若者の交流を日本で図る「平和の架け橋プロジェクト」を、コロナ禍による中断をはさんで4年ぶりに再開します。プロジェクト参加者の物語からは、建国、ナクバ、オスロ合意の歴史が見えてきます。

## 「ヨルダン国籍」のパレスチナ

「架け橋プロジェクト」は、イスラエルとパレスチナの若者を日本に招き、日本の若者も含めた共同生活を通じて交流を図ろうという活動です。現地では両者の間には分離壁で隔てられており、イスラエル人には「向こう側」に住むパレスチナ人への関心は薄く、パレスチナ人にとっては、接することのあるイスラエル人といえば境界の検問で見張っている兵士ぐらい、と言っているほど。語り合い、お互いを知る交流の機会はほとんどありません。その機会をつくるという意味が、このプロジェクトにはあります。

今回やって来る参加者は10人。イスラエル側はユダヤ人4人、アラブ人1人、パレスチナ側はヨルダン国籍2人（東エルサレム在住）、ヨルダン川西岸から2人、ガザから1人。双方から5人ずつと単純に表現できません。理由は75年前にさかのぼります。

1948年5月にイスラエル建国が宣言されると、これを認めない周辺アラブ諸国が攻撃を開始しました。第1次中東戦争です。アラブ人（パレスチナ人）の中には、戦争はアラブ側の勝利で終わりすぐ戻れると思って家を離れる人や、デイル・ヤシンという村でのユダヤ人によるアラブ人虐殺事件の影響で恐怖から逃げ出す人がいて、結果的には約70万人が故郷に戻れず難民となりました。49年7月までに停戦が実現し、この時の停戦ラインのイスラエル側に

は多くのアラブ人居住区も含まれ、イスラエル国民とされました。というわけで、イスラエル側の参加者にアラブ人がいるのです。

一方、停戦ラインで区切られたヨルダン川西岸は東エルサレムを含めヨルダンの管轄下に、ガザ地区はエジプトの管轄下に置かれました。国内に逃げてきた難民と西岸住民を合わせた多くのパレスチナ人を抱えたヨルダン政府は、その大部分にヨルダン国籍を与えました。67年の第3次中東戦争でイスラエルが西岸、ガザを占領した後も、西岸のパレスチナ人に与えられたヨルダン国籍は旅券の形で生きており、今も西岸パレスチナ人の15%ほどが持っているとのこと。パレスチナ自治政府の発行する旅券を持っている人の方が多いのですが、外国への渡航者の間ではヨルダン旅券を持つ人の方が多いという調査結果があります。

同じパレスチナ人でも、停戦ラインでエジプトの管轄下に置かれたガザの住民には、ヨルダンによる特典はありません。西岸と分断され、電流柵で囲まれたガザの住民の移動はより厳しく制限されており、ガザから交流プロジェクトへの参加者を迎えたのは2018年が初めてでした。今回、2人目の参加者としてハーデル・アルスラニさんが来日します。

## 和解の希望、立ちはだかる高い壁

イスラエル・パレスチナ紛争に終止符を打ち、和解へと向かう希望を持たせたのがオスロ合意です。イスラエルとパレスチナ解放機構（PLO）の代表がノルウェーの首都オスロで秘密交渉を続けた結果、93年9月のワシントンでの合意締結につながったのでした。イスラエルは武力闘争を続けていたPLOを交渉相手として認めていなかったし、PLOもイスラエル国家を認めていなかったのですから、交渉の席に着いたことが画期的だったのです。

この合意は正式には暫定自治政府原則の宣言と呼ばれ、パレスチナ側に暫定自治政府を設け、自治期間は5年間とし、締結から3年目までに最終的地位に関する交渉を開始する、としています。その暫定自治が始まったのは94年5月。ガザ地区と西岸中央部のヨルダン川に近い都市ジェリコが最初の自治区でした。その年の7月、アラファトPLO議長（当

時) がガザ入りしました。自身の出身地ですから「ガザ帰還」と呼ばれ、その時現地で取材した筆者は、PLO戦士らと共に「凱旋」した議長が熱狂的な歓迎を受けるのを目の当たりにしたものです。

自治区は翌95年9月に西岸のナブルス、ヘブロンなど7都市に拡大されました。そして96年1月、西岸地域には珍しく大雪が降る中、パレスチナ自治政府議長と立法府議会の選挙が実施され、アラファト氏を議長とするパレスチナ暫定自治政府が誕生しました。和平交渉のお膳立てができたわけです。

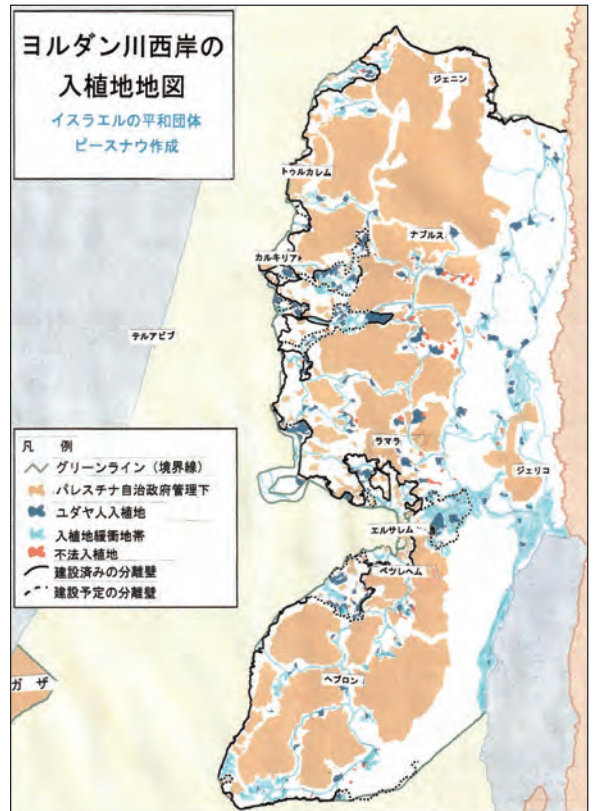
最終的地位協定を目指す交渉は96年5月に始まりました。解決すべき交渉の課題には

- エルサレムの帰属
- 難民の処遇
- 安全保障
- 国境の画定などがありました。そのどれをとっても、簡単に妥協点を見出せるものではありません。イスラエル側には、何十万人というパレスチナ難民が自国領に戻るのを認める気はありません。また、不可分の自国の首都と称するエルサレムは、95年9月のパレスチナ自治区拡大の時も、パレスチナ居住区の東エルサレムさえ自治区とするのを認めていません。

多難を思わせる前途。それでも暫定自治が実現し、交渉が始まりました。振り返れば、和解と二国国家共存という希望を語るムードは、このころがピークだったのかもしれない。

## エルサレム住民の証明を迫られる

プロジェクト参加者の1人、リンダ・アブ・アルハワさんの祖母は、東エルサレムのシェイクジャラという地区に住んでいましたが、ナクバの年にイスラエルによって追われ、西岸に逃れました。そこで生まれたのがリンダさんの母親で、現在は東エルサレムに住んでいます。難民の家族でありながらエルサレムに住めるようになったのは、エルサレム居住権を持つパレスチナ人男性と結婚したからでした。それはよかったのですが、母親を待っていたのは武装警官による不意打ちの家宅搜索。洗濯物入れなどをチェックしては、生活の拠点が実際にエルサレムかどうかを確かめるのです。また、エルサレム居住許可の延長を求めるために毎年、イスラエル内務省に出向かなければならなかったそうで、正式な居住権



を得るのに15年の歳月と1万5千ドルかかったということです。

エルサレムは最終的地位交渉で帰属を決めることになっていますが、イスラエル政府は、エルサレムのアラブ色を弱めていくためにパレスチナ人口を抑えることで、イスラエルと一体化した都市としての既成事実をつくらうとしています。

## 入植者の狼藉、罰せられるのは

既成事実づくりといえば、西岸のユダヤ人入植地はその最たるものです。筆者が現地の取材を始めた1993年から数年間は、入植地の新設、拡張を認めるかどうかはまだ大きな問題とされ、入植者の数も10万人を超えるぐらいでした。それが今や入植地は140カ所以上、イスラエル政府さえ認めていないものは100カ所以上ともいわれ、入植者人口は49万人と言われていました。

最終的地位交渉では、パレスチナ国家を目指して国境の画定も課題とされていましたが、まったく話し合われていません。それどころか西岸は入植地だらけで、入植地の安全を保証するための道路や緩衝地帯でパレスチナ暫定自治領域は寸断され(地図参照)、入植地が残る限り領土としての国家は体をなしません。しかも最近では、入植者のパレスチナ人



襲撃が相次ぐ事態となっています。

6月21日、パレスチナ自治政府のあるラマラ近郊の村を覆面をした数百人の入植者が襲い、家々や車を破壊し放火してまわりました。数日前に4人の入植者がパレスチナ人に銃撃され死亡したことへの報復だとしていますが、この村は以前からしばしば攻撃、いやがらせを受けていたということです。

西岸のパレスチナ人の間ではこのところ、若者を中心に武装闘争の動きが出てきており、これを抑えようとイスラエル側が軍事作戦を展開し、緊張が高まっています。そんな中で起きた入植者による大規模な襲撃事件。イスラエル治安機関からは、この襲撃を「民族主義的なテロ」とする声明が出されました。ところがこれに対し、イスラエルのネタニヤフ政権を支える極右政党「宗教シオニズム」の党首であるスモトリッチ財務相は「イスラエルの民間人による抵抗を、それがどんなに激しかろうと、アラブ人によるテロと同列に扱うのは不道徳だ」と非難したのです。財務相は入植地の住宅建設などを許可する権限を持ちます。閣僚によるこのような発言は入植者

たちに、パレスチナ人への暴力を認めるものと受け止められることでしょう。

その後、襲撃した入植者が捜査の対象になったかどうかのニュースはなく、むしろイスラエル軍による大規模な「対テロ作戦」が実行されました。7月3日、西岸北部ジェニンの難民キャンプをドローンで空爆するなどし、報道によるとパレスチナ人10人以上が殺害され、100人以上が負傷したとのことです。軍はパレスチナ武装勢力が集まる拠点を攻撃したのだとし、銃撃戦でイスラエル側でも兵士1人が死亡したと発表していますが、電気や電話は止められ、道路は掘り起こされるなどインフラが破壊されており、住民たちにとっては集団懲罰のようなものです。

暴力の応酬は武力では解決しないというので結ばれたオスロ合意。その原点から遠く離れてしまった現在の状況の中で、プロジェクトに参加するイスラエル、パレスチナ双方の若者たちは互いにどう向き合うのでしょうか。

## 報復の連鎖、どう乗り越えるか ~パレスチナ現地報告

三井 潔 (共同通信編集委員)

私は6月、パレスチナやイスラエルに足を運ぶ機会がありました。背中を押してくれたのは、1月に知り合ったばかりの井上弘子理事長でした。「互いを知ることが双方の不信を払拭する一歩」という理念の下で始まったパレスチナとイスラエルの若者交流事業「平和の架け橋プロジェクト」。その内容に感銘を受けたのが契機でした。現地では、プロジェクト実現を支えたフランシスコ会のイブラヒム・ファルタス神父と会い、パレスチナとイスラエルの根深い対立の一端も目にしてきました。報復の連鎖をどう断ち切り、乗り越えるのか、難しい課題です。厳しい情勢の中、「対話の努力を怠ってはいけない」という神父の訴えが、胸に響きました。

### 分離壁、憎悪と不信の象徴

「見てください。これが現実です」。ヨルダン川

西岸パレスチナ自治区の古都ベツレヘム。イエス・キリストが生まれたとされる聖誕教会近くのバルコニーから、イブラヒム神父が数<sup>キ</sup>先の丘陵地帯を指さしました。イスラエルによる入植地拡大と、パレスチナとの分離壁の建設が進む場所です。神父が「壁のおかげで相手の顔は見えず、対話もできません。壁は、双方を分断しているだけでなく地域社会も破壊しています」と嘆息しました。

壁は高さ9<sup>フ</sup>で、主要道を遮るようにして建てられていました。壁上には監視カメラと一体の機関銃が据えられ、パレスチナ側へのにらみを利かせています。廃虚となった目前の住居には多くの銃弾跡があり、戦闘の激しさが分かります。壁には、投石する若者の姿などイスラエルへの抵抗を示す絵がびっしりと描かれていたのが印象的でした。聖地は今、圧倒的な軍力を誇示するイスラエルと、抑圧され

るパレスチナ双方の憎悪と不信を象徴する場です。

イスラエルは、国連決議に反して入植地を拡大し分離壁建設を強行し、反発するパレスチナ側は一部過激派が自爆テロや銃撃でイスラエル人を殺害、市民の抵抗運動も根強いです。イスラエル側の攻撃もあり、今年に入り6月までにパレスチナ側130人以上、イスラエル側20人以上の犠牲者が出ました。ナチス・ドイツによるユダヤ人大虐殺の歴史を刻んだエルサレム郊外のホロコースト記念館には、パレスチナの苦難に触れた展示は見当たりません。ユダヤ人にとって悲願だったイスラエル建国から75年。かつての「被害の民」が、故郷を奪われる人の心情に思いが及ばない現実を目の当たりにしました。

### 一粒の種が平和の「実」に

イブラヒム神父は2002年、パレスチナのゲリラや若者200人以上が聖誕教会に立てこもり、イスラエル軍が取り囲んだ「包囲事件」で、39日間教会にとどまり、双方の橋渡し役になり平和的解決に導いた立役者です。互いに憎しみが渦巻き、紛争が絶えない世界で事件の教訓は何か。「対話の努力を怠ってはいけないうことです」と繰り返し強調していました。

神父に招かれ、教会付属高校の卒業式にも出席しました。卒業生を前に、神父が、パレスチナとイスラ



▲ 第3回「平和をつくる子ども交流プロジェクト」(2009年)の際に植えたオリーブの木。小さな苗木は15年を経て、実がつけられるまでに成長した。共同通信社の三井さんとヤクープ。ノートルダム・センター(エルサレム)にて

エルの衝突で多くの犠牲者が出ている現状に懸念を示し「皆さんが平和の担い手となるよう期待します」と語りかけました。次代を担う卒業生が深くうなずいていたのが脳裏に焼き付いています。

今夏、4年ぶりに再開する平和の懸け橋プロジェクト。井上理事長らの手で2009年、エルサレムに植えられたプロジェクトを記念するオリーブの苗木は大きく育っていました。「一粒の種が平和を導く『実』になるように」。そんな思いが詰まっていると実感しました。

三井 潔(みつい・きよし) 1990年共同通信入社。2001年以降、テロや平和構築、紛争問題を取材。2011~14年までマニラ支局長。22年から論説兼務の編集委員。

## 新聞に掲載されました!



共同通信の三井記者は、イスラエル・パレスチナの取材の前に、井上代表にインタビューして下さり、6月15日に記事が配信されました。長崎新聞、沖縄タイムス、福井新聞など20数紙に掲載されました。またキリスト新聞では7月1日、一面で平和の架け橋プロジェクトを大きく取り上げていただきました。



出川展恒氏 (NHK 解説主幹)

## 【極右政権下、イスラエル軍が】 大規模軍事作戦

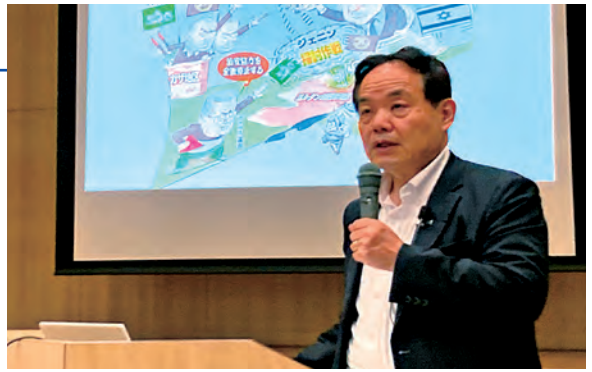
7月8日(土)、NHKの出川展恒解説主幹による講演会が東京都四ツ谷の聖イグナチオ教会〈ヨゼフホール〉で、対面とオンライン方式で開かれました。直前に、イスラエル軍がパレスチナ難民キャンプで大規模な軍事作戦を展開するという動きがあったため、予定していた内容を急きょ変更して、この事件の背景などについて解説されました。概要は以下の通りです。

### 武装組織の拠点つぶしと説明

イスラエル軍の軍事作戦は7月3日未明から5日まで続きました。ヨルダン川西岸の北部ジェニンにあるパレスチナ難民キャンプが、ハマスやイスラム聖戦などの武装組織の拠点になっているので、それをたたくのが目的だとされています。パレスチナ人に最低12人の死者と100人以上の負傷者が出たほか、数千人が住まいを追われました。2000年に始まった第2次インティファダ(対イスラエル抵抗闘争)の時も、ジェニンでは大規模な衝突が起きており、今回の軍事作戦はそれ以来最大のものでした。これに対する報復として、ガザ地区からイスラエル国内へロケット砲が撃ち込まれ、イスラエル軍が空爆で反撃する応酬がありました。

### 入植地強化を狙う極右

イスラエルの強硬な姿勢には、去年11月の選挙の



▲講演する出川氏(聖イグナチオ教会ヨゼフホール、東京・四谷)

結果成立した政権の強烈なタカ派色が反映しているようです。連立政権内で第2党の議席を持つ「宗教シオニズム」という極右会派は対パレスチナで非常に強硬な姿勢で、それが今回の軍事作戦にもつながっているとみられます。宗教シオニズムは国際法違反とされる占領下の西岸を「神から授かった約束の地」であるとして、「(ユダヤ人による)入植地建設は宗教的義務」と主張しています。

このような極右政権のもとで西岸の入植地が強化されると、中東和平プロセスには致命的となります。パレスチナ人に国をつくるチャンスを与え、二国家平和共存というのがオスロ合意の根幹ですが、将来のパレスチナ国家の領土を侵食する入植地が拡大すると、和平の実現は無理だとの見方を広げてしまうからです。9年間途絶えたままの和平交渉を復活するには、暴力の鎮静化と新たな交渉の枠組みが必要です。それまでは現状維持が必要です。

出川展恒(でがわ・のぶひさ) 1985年、NHK入局。91~92年テヘラン、94~98年エルサレム、2002~06年カイロの各支局長を経て06年7月から中東・アフリカ・イスラム地域担当の解説委員に。現在は解説主幹。

「平和の架け橋」プロジェクト2023 **資金が不足しています 支援をお願いします!** →



## 支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- \* 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
- \* 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
- \* いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**  
または **042-636-9218** (中山)

## 遺贈・相続寄付をご検討の方へ

当法人では遺産・相続財産のご寄付も、ありがたく頂戴しております。将来、平和の担い手となる聖地の子どもたちの教育支援や国際交流事業などの活動に使わせていただきます。

詳しくは当法人事務局までお問い合わせください。

**TEL.03-3908-6571**

2023年  
**8月20日(日) 14:00~16:30**  
**東京・聖イグナチオ教会 ヨゼフホール**  
 JR中央線/東京メトロ丸の内線・南北線『四ツ谷』より徒歩1分

3か国の参加者が、2週間にわたるプロジェクトでの体験を報告し、プロジェクト後の行動について、平和のために歩む決意を述べます。  
 歌やダンスなどによる文化交流もあります。

**プロジェクト2023参加者**



**インターネットで聖地のお買い物**

## 聖地のこどもマーケット <https://seichi.base.shop/>



昨年度から始めた当法人の「聖地のこどもマーケット」。オリジナル焙煎のコーヒーをはじめ、現地スタッフが直接求めたお土産などを扱っています。  
 マーケットの収益はすべて当法人の活動に使われます。ぜひ応援してくださいね。

ヤクブ・ガザウィのご両親から「聖地のこどもマーケット」へのプレゼント♪



ショッピングはこちら →

かわいいペンダント・ヘッドもあります！



イラク戦争から20年 イラクの写真、絵画、版画を展示

## メソポタミアの未来たち展

東京・赤羽のブックカフェ **青猫書房** で開催中

**7/26<sup>水</sup> - 8/28<sup>月</sup>**

**聖地のこどもマーケット出店！**  
 異国情緒あふれるレアなグッズも破格の値段で放出します！







## こだわりのイエメン・コーヒー 飲んで聖地を応援

### NPO活動を応援する価格です

聖地のこどもマーケットで扱うイエメン・コーヒーは、ドリップパックで一杯500円(税抜き)。なぜ高いのか?それは、150円の仕入れ値に350円の寄付をプラスして当法人の活動資金にしているからです。仕入れ値がもともと高いのは、イエメン産の希少豆を使ったスペシャルティ・コーヒーだからです。

### スペシャルティ・コーヒーとは?

カップの中のコーヒーの風味が素晴らしい美味しさであり、その美味しさに誰もが満足できるコーヒーであること。そのためには、コーヒーの豆からカップまで(From seed to cup)の生産体制、品質管理が徹底していることが必須です。私たちは味にこだわり、また生産者にも適正なお金が支払われるよう、スペシャルティ・コーヒーを扱っています。

### イエメンは、コーヒーの発祥の地

世界のコーヒー豆はブラジルや、ベトナムなどがシェアを占めており、アラビカ種といっても、アラブ(諸国)でコーヒー豆を作っているところはあまり聞きません。実はイエメンこそが、コーヒー発祥の場所なのです。

エチオピアに生息していたコーヒーの原木がイエメンにわたり、そこでイスラム神秘主義者たち(1960年頃の流行歌「コーヒー・ルンバ」では「アラブのお坊さん」と表現)によってオスマン帝国に広がり、さらにヨーロッパに伝わります。昔はコーヒーの苗木は厳しく管理されており、すべての豆はイエメンのモカ港から積み出されていました。しかし1616年にオランダがコーヒーの木を盗み出してから、アジアや中南米の大規模農園で栽培されるようになりました。その後イエメン・コーヒーはすたれ、忘れ去られていきました。

イエメンから日本に留学していたターレックさんは、2015年、イエメンの内戦が始まったため、帰国できなくなりました。故国を何とか助けたいと思ったターレックさんは、イエメンのコーヒー産業を復活さ

せて、戦争で疲弊した経済を復興させようと思いました。こうして立ち上げたのが「モカ・オリジンス」という会社です。農家ときめ細かくやり取りし、優れたコーヒーを作ることに成功。「国際カフェ・テイストリング競技会」の日本大会で、2019、20年と連続で金賞を受賞しました。

### 標高2000mの高知栽培

イエメンの標高2000mを超える乾燥した高地で作られるモカ・コーヒーこそがコーヒーの起源。イエメンやオスマン帝国にいたユダヤ人商人たちも、このコーヒーを世界に広げるのに貢献しました。

聖地のこどもマーケットでは、モカ・オリジンスが輸入したコーヒー豆を扱っています。100gの粉も販売していますので是非ご賞味ください。



写真提供モカ・オリジンス

イエメンのコーヒー農家の人達。  
昔ながらの手摘み、天日干し。



- ◆ドリップ・パック 3個入り1,800円 (送料、税込み) 6個入り3,240円 (送料無料で税込み)
- ◆粉コーヒー 100g 2,160円 (送料無料で税込み)

価格には当法人の活動への寄付も含まれています



# 2023年度 総会のご報告

当法人の2023年度通常総会が去る6月18日(日)に開催され、  
2022年度の事業報告書と決算書、2023年度事業計画書と予算書が  
承認されました。

## 2022年度 活動計算書 2022年4月1日から2023年3月31日まで

(単位:円)

【経常収益】		
【受取会費】		
正会員受取会費	326,000	
賛助会員受取会費	18,500	344,500
【受取寄付金】		
受取寄付金	8,421,008	
施設等受入評価益	0	
ボランティア受入評価益	0	8,421,008
【受取助成金等】		
受取助成金	0	
受取補助金	0	0
【事業収益】		
参加料金収益	2,568,709	
コーヒー売上高	951,558	
イスラエル・パレスチナ物品売上	14,052	3,534,319
【その他収益】		
受取 利息	20	
為替 差益	3,894	
雑 収 益	1,000,000	1,003,914
経常収益 計		13,303,741z
【経常費用】		
【事業費】		
(人件費)		
給料手当(事業)	0	
役員報酬(事業)	900,000	
通勤費(事業)	0	
決定福利費(事業)	0	
退職金(事業)	0	
人件費計	900,000	
(その他経費)		
コーヒー仕入高	277,293	
諸謝金(事業)	708,297	
水道光熱費(事業)	43,769	
地代家賃(事業)	1,125,000	
印刷製本費(事業)	309,024	
会議費(事業)	227,631	
旅費交通費(事業)	0	
旅費海外(事業)	2,192,142	
研修費(事業)	116,198	
通信運搬費(事業)	396,795	
消耗品費(事業)	24,360	
賃借料(事業)	0	
租税公課(事業)	0	
支払手数料(事業)	94,796	
支払助成金	2,255,192	
保険料(事業)	17,100	
交際費(事業)	16,905	
業務委託費(事業)	1,347,751	
その他経費計	10,052,253	
事業費 計		7,914,688

【管理費】		
(人件費)		
役員報酬	429,000	
給料手当	1,041,050	
法定福利費	0	
退職給付費用	0	
退職金	0	
雑給	100,000	
通勤費	75,720	
人件費計	1,645,770	
(その他経費)		
イスラエル・パレスチナ物品仕入高	64,495	
印刷製本費	4,670	
会議費	43,402	
旅費交通費	458,270	
通信運搬費	84,820	
消耗品費	201,439	
水道光熱費	43,769	
地代家賃	375,000	
修繕費	0	
広告宣伝費	0	
研修費	0	
寄付金	10,000	
諸会費	41,375	
租税公課	20,640	
支払手数料	284,012	
雑費	0	
新聞図書費	0	
交際費	16,500	
業務委託費	1,169,896	
その他経費計	2,818,288	
管理費 計		4,464,058
経常費用 計		14,516,311
当期経常増減額		△ 1,212,570
【経常外収益】		
前期損益修正益		18,577
経常外収益 計		18,577
【経常外費用】		
前期損益修正損		0
経常外費用 計		0
税引前当期正味財産増減額		△ 1,193,993
法人税等		69,900
当期正味財産増減額		△ 1,263,893
前期繰越正味財産額		2,412,936
次期繰越正味財産額		1,149,043

# 支援団体・支援者のお名前

対象期間：2022年4月1日～2023年3月31日  
(敬称略 匿名希望の方のお名前は省かせて頂きました。)

## 支援団体

大阪聖ヨゼフ宣教修道女会  
幼き聖マリア修道院  
オタワ愛徳修道女会  
学校法人育英学院目黒サレジオ幼稚園  
カトリックイエズス会  
カトリック葛西教会「ゆりの会」  
カトリック片瀬教会  
カトリック北広島教会  
カトリック金剛教会  
カトリック至聖贖罪主修道女会  
カトリック殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会  
カトリック東京カルメル会女子修道院  
カトリック新田原教会  
カトリックノートルダム教育修道女会  
カトリック松戸教会コスモスの会  
カトリック松原教会  
カトリック煉獄援助修道会  
カルメル会修道院  
木村洋行株式会社  
暁星小学校シャミナード会  
グッドゥ株式会社  
汚れなきマリアのクラレチアン宣教修道女会倉敷修道院  
坂出聖マルチン修道院  
シトー会伊万里の聖母修道院  
シトー会那須の聖母修道院  
守護の天使の姉妹修道会  
聖アンナこどもの家園児一同  
聖ヴィアンネ会  
聖クララ会修道院  
聖ドミニコ宣教修道女会松山修道院  
聖心の布教姉妹会  
聖心会  
聖パウロ修道会  
聖フランシスコ修道院  
聖ベネディクト女子修道院  
聖母被昇天修道会青森修道院  
聖母奉献修道会

聖和会新井・笹川  
天使の聖母トラピスチヌ修道院  
燈台の聖母トラピスト修道院  
十勝カルメル会修道院  
ドミニコ会聖ヨゼフ修道院  
日本キリスト教団まぶね教会  
日本キリスト教団巢鴨ときわ教会アウラの会  
日本キリスト教団白鷺教会教会学校  
マリアの宣教者フランシスコ修道会  
横浜雙葉小学校父母の会  
レデンプトリスチン修道院

(48団体 順不同)

## 個人支援者

Fr.ロジェ・プロヴァンシェ	有田美江	伊藤安以
HARVEY PAUL A.S	アレン玉井光江	伊藤夏代
相葉敬子	栗田健治	伊藤勝子
青木洋子	安藤真樹	伊藤多恵子
青山博子	飯田ルナ	井上ちひろ
青山美恵子	井口実紀	井上弘子
赤崎克俊	池永廣美	井上志帆子
秋山吉子	石垣光正	井上静子
浅井明子	石川直美	今井弘美
浅井芳和	石黒亮	今村宏子
浅沼誠子	石田知子	今村美志保
東純子	磯田幸子	入江兄二
安達結美子	磯谷真理子	岩崎修
阿部圭子	磯野はるか	岩崎正幸
天田雄次	磯部雅子	岩崎守
天野直秀	磯部起与子	岩田卓三
天野真理子	板垣勤	岩本憲嗣
荒井啓史	板橋虎徹	植村惇子
新居孝彦	市川黎子	宇野順子
荒川淑	伊知地広美	海堀真紀
新里苗子	伊藤ちあら	海野綾子





浦田むつみ	川村栄子	宿澤恵子	田中博	早川春代	溝口昂明
栄林ヒサ子	川本和子	白水明代	田辺知之	早川昌江	三井潔
荏原えり	瓦妙子	白柳隆明	塚田道子	林一江	宮川園絵
遠藤香恵子	神原ちず子	助廣弘子	谷弘子	林裕美子	三宅哲子
大泉梢	木内一美	関安幸	谷口裕貴	葉山文子	向井純子
大澤由紀子	北楯暢子	関口素子	谷山正恵	原桂子	村上宏一
太田晴子	北原豊子	関根順子	谷山正恵	原田直子	村上則子
大谷恵美子	木村護郎クリストフ	関野晴人	土屋美和子	春山美智代	村瀬バシリザ
大山恵津子	木村聡子	関屋スミ子	出川展恒	半田和巳	望月美代乃
大西美恵	木村浩之	鈴木一彦	手嶋直美	日向寺司	本橋淑子
岡晶子	木村靖子	鈴木國弘	外山経子	平賀徹夫司教	森川久美子
岡本みどり	喜山聖子	鈴木賢治	富崎之夫	平原奈津子	守口毅
小川千枝子	京極由理子	鈴木幸子	内藤和子	弘中由美	森本明子
奥村恵子	清川明哲	鈴木登喜子	中井さつき	深澤美知子	保尾真紀
奥村聡	国代京子	鈴木敏博 邦子	中尾友和	深田久子	安田美知子
小坂田さち子	久保久子	鈴木典子	中島紀史子	福田幸子	矢谷啓子
尾崎一三	久保田進	高井真悟	中島聖子	福崎順栄	山内春治
尾崎裕子	糸田治夫	高井真悟	中島敏夫	福島貴和	山口裕子
小澤知江子	倉田昌子	高馬和子	永田ふく代	福島正子	山下るみ子
小田淳	栗栖徹	高島文枝	長坪光	福瀬くに子	山下義文
小田功司	クリストフエン	高瀬紀子	中野剛	藤井素子	山下光子
小野佐以子	栗原健	高野千草	長野浩二	藤村栄三郎	山田千秋
小野修	黒田道子	高橋ひろみ	永野明子	藤原伸子	山田栞里
小山田匡宏	胡美喜子	高橋和子	中村寿美	藤原真理子	山田康子
海保やすよ	小久保かつ	高橋佳代子	中村聡志	渊上恂子	大和四夫
柿崎ゆか子	小塩恒子	田川照子	中村季子	Sr.古屋恵子	山本強
角田和子	後藤幸	柘植薫	中本徹信	古谷恵子	山本浩
葛西咲子	後藤秀次	田口幾子	中山宏・夕里亜	星昇次郎	横山真希子
櫻谷健	後藤田遊子	竹井雅子	中山泰羊・喜祈	星村美絵子	吉川英子
梶原晴美	小西一枝	竹川典秀	永吉恵子	細谷彬	吉田邦子
柏恵津子	小西羊一一枝	武田英夫	蕪木直江	堀秀樹	吉田恵子
柏孝夫	小林惇	竹谷純子	蕪木利夫	堀正巳	吉田とし子
加登本拵	小林美紗子	竹脇美帆子	西勝健夫	本田江身	吉田友一
加藤まゆみ	小山内州一	田制則子	西田百合子	本間攝子	吉田良子
加藤恵子	斉藤章太郎	城トミ子	野口重光	馬越由美	ラザフォード貴美子
加藤千恵子	榊原祥子	立原美恵子	野田健太郎	眞下まゆみ	和田昌子
加藤由美子	坂口泰子	伊達由美子	野田由利	馬渡二嘉	渡部朋子
門口敏子	坂本雄郎	立林久美	野村智美	松崎治男	渡邊こずえ
門倉昭博	薩田寿隆	立脇和夫	野村英司	松本知子	渡邊公伸
加納貞彦	佐藤克裕	田中一子	野村泰樹	松本武史	渡邊禮子
鎌田英明	佐藤京子	田中さわこ	乗倉寿明	三浦和子	
釜谷公子	佐野彰	田中節子	橋本和子	三國谷信子	
神野裕美	柴崎憲子	田中道子	服部英子	三島八重子	
川口栄子	下路利恵子	田中弘子	花岡皛	水野真由美	

(323名 順不同)

### イブラヒム神父に取材



ベツレヘム聖誕教会の前で。▶  
2002年の事件当時、200人以上のパレスチナ人が立てこもり、教会はイスラエル軍の戦車に取り囲まれた。



◀「ベツレヘム聖誕教会包囲事件」の取材を打合せ。右から、事件を平和的解決に導いたイブラヒム・ファルタス神父、インタビュアーの三井潔さん（共同通信）、通訳・コーディネーターのヤクブ・ガザウィ。

### 町で出会った子どもたち

ヨルダン川西岸地区ラマッラで。



▲ 公園で遊ぶ仲良しのこどもたち



▲ 自転車レースのために修理中。（山上の町ラマッラではマウンテンバイクが人気）



▲ 男の子も女の子も一緒にサッカー



▲ 幼稚園での一コマ

### 聖地点描

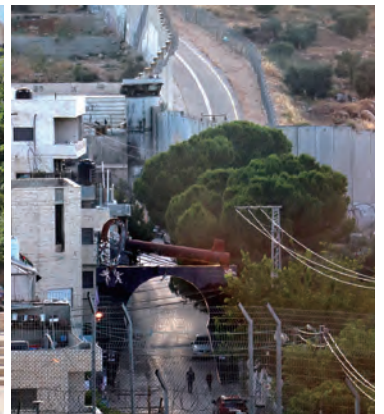
エルサレム旧市街。アラブ人の住む界限だが、『西の壁』への近道なので、祈りに向かう超正統派のユダヤ人も見られ、双方の敵対心から緊張が走る。



▲ テラ・サンクタ学院幼稚園の卒業式、後列中央にイブラヒム神父（エルサレム）



▲ 旧市街最大の再建されたシナゴグにて。兵士の奥には金でできたメノラ（ユダヤ教シンボルの7本枝燭台）が見える。（エルサレム）



▲ 分離壁に沿ってできた難民キャンプ『アイダ』のゲートに大きな鍵が飾られている。『鍵』は難民にとって「必ず故郷へ帰る」決意のシンボル。



▲ ボーイスカウトのパレードで。かぶっているのは、「ケフィエ」というアラブの伝統的なかぶりもの



▲ 揚げたてをどうぞ！ ひよこ豆の揚げ物「ファラフェル」

写真撮影：ダリーヌ・ラマ、ヤクブ・ガザウィ、ラハド・シオ、佐藤寛裕、三井潔 \*の写真撮影：武隈周防共同通信カメラマン